



[今月の聖書]

C1712 『一つの望み』

「からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである。」(エペソ 4:4-6)

イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。(マタイ 2:1-2)

「イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。(ヨハネ 8:12)

「神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。」(第1ヨハネ 4:9-10)

メリークリスマス！クリスマスおめでとうございます。クリスマスの象徴は①飼葉桶の中の幼子②ベツレヘムの野原で羊飼いらが聞いた天使の賛美、そして③東方の天文学者達が見た星と彼らの礼拝です。その記録はマタイとルカのみが書き残しています。しかし、この三つのストーリーの背後にはそれぞれ劇的な混乱がありました。父母となったマリアとヨセフは身重にもかかわらず、ローマ皇帝の一方的な命令で、70キロの旅を強いられ、親戚からも蔑まれました。それは疲れ果てた夜でした。羊飼いらは貧しさと不安の中に冬を迎えようとしていました。遊牧民には人としての人格も認められない無力にもかかわらず救い主を第一に見たのです。そして東方の賢者達はただひたすら救い主を礼拝したい一心で、2000キロの危険な砂漠の旅をしてきたのです。そうです！クリスマスの背景は不安と混乱、分裂と闘争でした。

希望は失望の真っ暗な空に輝く星なんですね。あなたが、弱さ、不安、病、貧しさ、そして人間関係の難しさを経験しているような時、主が一番近くにいるくださるのです。ボンヘッファーは「イエスキリストは人生のどん底で会いたもう神である」と言いましたが、まさにそのような思いでクリスマスを迎えたいと思います。年頃には「よい業を始められた神は…キリストの日までに…完成してくださる」(ピリピ 1:6)と標語を掲げました。混沌とした世界にあって、神のご計画は着々と進んでいます。ですから一つの希望であるキリストをしっかり見つめ、そのみことばに聞き従って行きたいと思います。神の愛はそこにあるのです。

兄弟姉妹の上に唯一の希望である主の祝福がありますようにお祈りいたします。

(お知らせ)

- * 12月20日(水) 11:00 CFI 賛美の集い(田園調布チャペル)
- * 12月11日(月) 16:00 東日本大震災復興支援超教派一致祈祷会(淀橋教会)
- * 12月9日(土) 18:00 メリークリスマスイン青山(アイビーホール青学会館グローリーチャペル チケット1000円 お申し込みは事務局へ)
- * 2018年1月1日(月) 13:30 元日礼拝(田園調布チャペル)「恩寵超越」(エペソ 3:20)

一年間CFIメッセージを聞いて下さり、また多くの方々から知らせて下さり、献金をもってお支え下さいましたことを心から感謝申し上げます。2018年も、みことばを灯火として共に歩いて参りたいと願います。健康と財政とスタッフのためにお祈り下さい。

広嶋 都留 (東京都)
 ニューヨーク在住 春日祥子姉より紹介

「 待降節(アドベント)に思う 」



毎月何らかの祭日がある日本のカレンダーに生活を馴染ませようとしているうちに12月になってしまいました。New York 生活が長かった私は12月を毎年特別な思いで迎えていました。街並みやアパートの窓際はクリスマスの飾りでひとときわ明るくなり、Advent 中はヘンデルのメサイアが街角の教会で演奏され、喜びと楽しみに浸りました。

実は私、1948 年以来、メサイアの演奏会を一度も欠かしたことが無いのです。どこに住んで居ても年一回メサイアを聴くことが待降節の迎え方でした。私のキリスト教との出会いの原点でした。

1948 年 12 月、青山学院大学合唱団、東京 YMCA 合唱団、私ども恵泉女学園の高校生、英文科専門学校の学生達は日比谷公会堂の大舞台で戦後初のヘンデルの「メサイア」の公演に参加していました。10 ヶ月の間、週一回、音楽の先生であった奥田耕天先生の指導でパート練習をし、日曜日午後はお茶の水の YMCA での合同練習を重ねての晴れの舞台に立っていました。合唱団は KAY 合唱団と命名されました。先生が用意されたわら半紙刷りの楽譜、日々の生活は貧しかったですが、皆大声で歌える喜びで声合わせの日曜日を楽しみにしていました。夢中で英語の曲を覚えました。私は16歳でした。

先生の「聴衆に質の高い、喜びを与える音楽を」の夢が叶えられるように特訓が続きました。指揮者はNHK 専属の山田一雄氏、独唱者も一流の方達で編成されました。リハーサルも無事終わり、皆わくわくと本番を迎えました。ところが公演の途中で突然停電になり、公会堂は真っ暗になりました。当時は節電のための停電が一般家庭で良く有りましたが、公演途中の停電は予想外だったのです。楽団員は楽譜が見えねば演奏は無理です。間もなく、舞台の袖から奥田耕天先生が現れ、合唱団にクリスマス聖歌を歌う様指示をなさいました。「きよしこの夜」をピアノの伴奏で歌い始めました。とその時、二階のバルコニー右側から素晴らしいバリトンのドイツ語「きよしこの夜」が聞こえて来ました。私ども合唱団は静かにハーモニー。大拍手でした。何曲かクリスマスカロルを歌っている中に、電気が戻り、公演は続けられ、ハレルヤコーラスを聴衆と共に合唱し公演会は大成功、満たされた気持ちで家路に着いたのを覚えています。その夜、小田急線の梅丘駅に着いた私を迎えに来てくれていたのは襟巻きをぐるぐる巻きした父でした。夜道は真っ暗な時代でした。 KAY 合唱団のメサイアはそれ以来、公演会の最後にクリスマスカロルを聴衆と一緒に歌うことが引き継がれていました。惜しむらくは合唱団員の老齢化で大分前に解散したそうです。

*バリトンの主はネッケ・レヴィエ教授

今年は何処でメサイアを聴けるでしょうか。アドベント、御降誕日を感謝と喜びで迎えましょう。

◇投稿募集のご案内◇

皆様の原稿をお待ちしています。

毎月のCFIニュースレターの裏面に順次掲載させていただきたいと思います。

- ・すくい体験のあかし
- ・個人的願いや祈り
- ・信仰生活のあかし
- ・主にある交わりのレポート
- ・最近気づいたことや発見したみことば
- ・CFIメッセージの感想や教えられたこと

何でも結構です。800字程度で、手紙、ファックスかメールで送ってくだされば幸いです。